



ドイツに渡る頃(1930年代初め)の  
肥沼信次さん  
(写真は義妹の肥沼八重さん提供)

敗戦ドイツに散った日本人医師

## 肥沼 信次氏

(中学22期)

八王子市総合経営部  
総合教育会議専門管理官

野村 みゆき氏(高校25期)寄稿

～会報『紫芳』45号より～

◎表記・表現は『紫芳』45号発行時に基づきます

第二次世界大戦が終了した60年前、立川高校の前身府立二中の大先輩であり、八王子出身の偉大な医師であった肥沼信次氏(中22期)は、敗戦の瓦礫に覆われたドイツにいた。彼は、郷里日本の桜の美しさを人々に誇り、皆にも見せたい、もう一度見たいと語りながらも、帰ろうとはしなかった。

### ◆ 肥沼信次という偉大な先輩 ◆

野村みゆき氏

肥沼氏については、1995年に出版された舘澤貢次氏の著書『大戦秘史リーツェンの桜』で紹介されるまで、知っている人はほとんどいなかったに違いない。

肥沼氏は1908年(明治41)父・梅次郎、母・ハツの長男として八王子市に生まれる。梅次郎は医学校「済生学舎」で医学を学び、八王子市内に「肥沼医院」を開いていた。その影響もあってか、肥沼氏は府立二中時代、アインシュタインに憧れ、キュリー夫人を尊敬し、「是非ドイツに行きたい」と度々口にしていたという。府立二中卒業後、日本医科大学を経て、東京帝国大学医学部放射線教室に進み、1937年(昭和12)満を持してドイツに向かい、ベルリン大学(現フンボルト大学)の医学部放射線研究所で学ぶ。東洋人として初の教授資格を取得した医学博士であった。



肥沼さんが多くの発疹チフスやコレラの患者を救い、自らもチフスに感染して死を迎えた伝染病医療センター。現在はヴリーツェン市の庁舎となっている。



市内フリート広場内の墓地にある肥沼さんの墓には、古代ギリシャの医神エスクレピオスの杖が刻まれている



旧ベルリン大学医学部研究室での肥沼さん(肥沼八重さん提供)

1945年(昭和20)、第二次世界大戦終戦後間もないソ連軍占領下のヴリーツェン(Wriezen,旧東ドイツ)に「伝染病医療センター」の初代所長として踏み止まった。当時、戦後の混乱から町はチフスやコレラが大流行していたからである。所長であり、たった一人の医師であった肥沼氏は、診療器具や薬さえ不足するなかで寝る間も惜しんで働き続けて多くの患者の命を救ったという。1946年、自らも発疹チフスで倒れ、町民の深い悲しみのなか、同地で客死された。

ヴリーツェンで肥沼氏は今も神のように慕われていて、彼の命日である3月8日がやってくると毎年、市長以下、当時命を救ってもらった人々やその遺族らが彼の墓前で追悼式を行っている。肥沼氏と共に病人を救った看護師や市民の声を交えて、町が肥沼氏を慕っている様子は、テレビ番組でも紹介された。

## ◆ ヴリーツェンへの旅 ◆

2005年、再び肥沼氏の名前が八王子市民の間で話題となった。それは、私の勤務する八王子市役所で、国際姉妹都市の検討が始まる少し前だった。

肥沼氏と八王子市との正式な出会いは、1999年、「ドクター・肥沼顕彰記念碑設立準備委員会」が市に設置され、八王子地区の募金活動に市として協力を求められたのが最初だった。

その後、肥沼氏の名前を聞いたのは、2005年3月、桜美林大学大学院客員教授の川西重忠氏が八王子市長を訪問し、ヴリーツェンのジーベルト市長の依頼で、八王子市と姉妹都市の提携をしたいという希望を伝えてくださった時である。

ちょうどその頃、八王子市では、海外に友好都市を持ったらどうだろうという話題が出始めた頃であったため、縁ある都市の一つとして、検討することを約束した。市は、2004年11月、本格的に海外友好都市との交流を検討する「海外友好都市調査委員会」を設置していた。

一方、市内にあるNHK文化センターでは、ヴシーツェンで肥沼氏の墓を探し求め、彼を慕う人々から彼の献身的な仕事振りを聞いてきた川西教授に講演を依頼した。集まった聴衆は30人程度と決して多くはなかったが、ヴリーツェン市民の肥沼氏に対する厚い尊敬の念を、何とか八王子市民に伝えようとする心をこめた教授の語り、参加者の胸を打ち、肥沼氏の伝染病との壮絶な戦いに涙する人も少なくなかった。

川西教授の講演を聴いた数人が、もっと多くの人に肥沼氏を知ってもらおうと、再度川西教授を招き、自分たちが関わっているボランティア団体の主催で講演会を開催した。会場には、主催者の予想を上回る150人を超す人々が集まった。

この一連の動きの中で、実際にヴリーツェン行ってみたいという人が出てきて、2005年11月、友好都市調査委員会の担当所管である市民活動推進部が中心となって、市民によるヴリーツェン訪問が計画されることになった。

飛行機で半日もかかるドイツ、しかもベルリンのように有名ではないヴリーツェン市、また、急遽決まった訪問計画で、担当部長も何とか休暇を捻出して、市民による「八王子ゆかりの地への訪問旅行」はすぐさま決行された。

私も、八王子紫芳会のみなさんに参加を呼び掛けたものの、息子の受験と重なっていたため参加をあきらめた。最近の国際情勢を考えると、受験をするのは私ではなかったのだし、あの時訪問しておけばよかったと悔やまれる。(本当は、飛行機が怖かったのですが...)



肥沼さんを忘れないための記念碑



ヴリーツェン市に建立されている肥沼信次記念館



ヴリーツェン市の現在の町並み

## ◆ 交流のはじまり ◆

今回のヴリーツェンへの訪問に際し、黒須隆一八王子市長の親書をジーベルト市長に届けた。ヴリーツェンの市民は、肥沼氏の活動を高く評価していて、彼の功績を次世代へ伝えるための「肥沼委員会」という組織が今もなお設置されている。八王子からの訪問団に対し、市長や肥沼委員会のメンバーは大歓迎してくれた。老人センターで行われた市民相互の交換会には、ジーベルト市長の希望により、次世代を担う高校生も来ており、肌で感じる暖かい市民交流が行われた。日本からは、着物や茶道具を持参した市民が茶の湯を紹介することもできた。

市民活動推進部長にこの旅行の感想を聞いた。「ジーベルト市長をはじめとする町の人々の、肥沼氏の偉業を語り継ごうという熱意に直接触れることができたことは大きな成果だった。今後、八王子の多くの市民にヴリーツェン市民の思いをどのように伝えるかを検討したい」ということだった。

八王子市は、アジアの複数の都市と友好交流都市として提携していく考えである。

今回、偉大な先輩が時を越えて遠くドイツに暮らす友人を紹介してくれた。肥沼氏は、私たち郷里の人々と、自らの使命を果たした町の人々とが地道であっても心と心の交流を行うことをきっと望んでいると思う。興味がある方には、肥沼信次という大先輩の功績に是非触れていただきたい。

### ◎参考図書

館澤貢次『大戦秘史リーツェンの桜』(1995年、ぱる出版)

川西重忠『わしズムVol.12』「肥沼信次を知っていますか？」

(本のタイトルは「リーツェン」となっていますが、現地の発音では「ヴリーツェン」が正しいようです)

◎カラー写真提供 白柳和義氏

◎表記・表現は『紫芳』45号発行時に基づきます